

チュチカハウの肖像

—マヤ系先住民の祭司に関する民族誌的覚書(I)—

Un Retrato de *Chuchiqajaaw*:
Notas sobre los Sacerdotes Mayas en Momostenango,
Guatemala.

池田光穂

IKEDA, Mitsuho

1. はじめに

グアテマラ西部高地モモステナンゴ (Momostenango) ではマヤ系先住民諸語の主要なひとつであるキチュ語が話される。そこはグアテマラ西部高地のなかでも比較的集中的な民族誌学的調査がおこなわれてきた地域である (Carmack 1995)。その中でもマヤの口頭伝承や説話 (Tedlock 1996) や祭司 (priest) であるチュチカハウ (*chuchqajaaw*) がとりおこなう儀礼や彼/彼女らの宇宙観に関する民族誌については豊富な資料がすでに報告されている (Tedlock 1992[1982])。しかしながら、1980年代初頭に激化する内戦によって祭司がおこなう諸儀礼は、軍部ならびに自警団組織によって、少なくとも公式的には破壊的活動と見なされ、その活動は一時的に社会の表面から姿を消した。その数年後に再び公衆の前に姿を現した時には、一様に儀礼の規模は拡大し参加者は増大したといわれ (Tedlock 1992:xiv-xv)、儀礼をめぐる社会の理解と位置づけにも変化が生じたことが示唆される。

儀礼は社会の要請にもとづいて挙行されるものであり儀礼を取り巻く社会的環境が変化すれば儀礼は、その内容を柔軟に変化させる可能性と融通性を具備しているものであるが (eg. ブロック 1994; 田辺 1997)、他方で儀礼研究は集合表象の反映として儀礼内容を保守的で普遍的な表現行為としてとらえると

いうデュルケーム的伝統もまた存在する。そのためにエージェンシーとして儀礼の実践者をとらえるという観点が閑却され、静態的な儀礼の宇宙観の管理者として見なす傾向は現在も強い。後者の立場からみた儀礼と儀礼の執行者のビジョンは、現在においても影響力をもつパラダイムとして君臨し、その繁栄自体が人類学全体のパラダイム革新の芽を摘む要因となっているのである。

都市化環境における実践共同体に関する民族誌的調査研究は、儀礼をはじめとするさまざまな実践の場における行為主体をエージェンシーとしてとらえることで、〈社会から〉の実践の拘束性と同時に〈社会にたいして〉の実践の創造性というふたつの局面を社会科学的に再定位することを試みる。本報告は、そのような研究の方向性を念頭においた民族誌学的記録²⁾として位置づけられるものである。なお、本報告は紙面編集の都合上一度に掲載されることが許されず、やむをえず2部に分割して報告される³⁾。

以下ドン・ディエゴとドン・ベニート(次号予定)という仮名で語られる2名の祭司に関する民族誌的素描をおこなう。これらの情報は、おのおの2人の男性とのインタビューを通して私が構成した儀礼の主宰者の考察のために収集された。内容は2人の男性が述べたことに従っており、歴史的事実との符合関係の確認はおこなっていないことに注意されたい。

2. ドン・ディエゴ

ドン・ディエゴ(仮名)は1930年に生まれて、1999年現在69歳である。1936年、つまり彼が6歳の時にバクロム(聖地のひとつ)に父親に連れていってもらったことがあるが、その時、多くのマヤ祭司が四方に向かって祈っているのを見ている。彼の父親もまたマヤ祭司だった。

1963年つまり彼が34歳になるまでは、15年間にわたり飲酒の際には酒乱となり、時には街頭に寝ることもしばしばであった。また、周りの人たちに借金があり、その総額は15,000ケツツアルにもなっていた。

マヤ祭司(Sacerdote Maya)は、すべての神(Dios de Todo)に祈る。特に土地の神であるが、神格の中でもっとも最高なものはイエス・キリストで

ある。キリストの次に、さまざまな天使たち、土地の神、トウモロコシやフリホーレスの神に祈るのである。マヤ祭司が、毎日バクロムなどの祭壇のあるところに赴いて、ロウソクやコバルなどを捧げるのは、それらの神々に対して人々の生活の平穩を祈るためである。

マヤの暦では、20日をひと月とする13カ月の暦を使っている。6月2日は、年が変わる¹。この日には一切の負債が返されなければならない。6トッホ (6toj) は一年の終わりである。

彼が最初についたマヤ祭司は、ドン・G・J・Bで、彼はとても移り気な人だった。

マヤ祭司のことを、キチェ語では*chuchqajaaw*と称する。この言葉には儀礼や慣習を意味するコストウンブレ (*costumbre*) を行なう者という意味があるとドン・ディエゴは言う。マヤ祭司の目的は、世界に対して存在を示すことだ ("da presente al mundo")。ところが、現在は、その世界が失われている。そのために強盗、窃盗、襲撃、蛇などの危険な動物への遭遇がおこっている。

モモステナンゴにおける儀礼に従事している者のうち7、8割は、ロウソクやコバルを焚く (*quema*) 人たちである。これをコストウンプリスタ (*costumbrista*) という。コストウンプリスタは、商売がうまくできるように、などの世俗的な祈願を、ロウソクなどを焚くことで祈ることができる人たちである。

それに対して、マヤ祭司 (*Sacerdote Maya*) と呼べる人は2、3割に過ぎない。マヤ祭司とは、バラと呼ばれる道具を用いた託宣ができて、毎日祭壇に向向いて人々の平穩を祈ることができる人たちだ。マヤ祭司とは、カトリック教徒と同義である。狂信的なカトリック (*catórico fanático*) ——アクション・カトリカのことを示唆するものと思われる——は教会内での信仰しか容認しないが、マヤ祭司は教会の代わりに祭壇に向向くからである。

商売人は、マヤ祭司に依頼して、祈願をしてもらうことができる。エバンヘリコ (福音主義派プロテスタント) の商人であるドン・Bを含めてドン・ディエゴは、祈願行為を総称して「焚く *quema*」という表現をしている。これは、

ロウソクとコバルを文字通り祭壇において火にくべるという行為を指しているからなのだろう。

コストウンプリスタが努力すればマヤ祭司になることができるかと私(池田)が質問すると、ドン・ディエゴは可能だという。ただし、それは人々のために奉仕するという決心が必要であり、修業を積んで(sacrificio=自己犠牲を重ねて)、行動に責任をもち、それなりに努力しないといけない。もちろん、本人にその素質があって、「神はその人を導く」のである。

1998年に儀礼の聖地であるバクロムにおいてコンクリートの柵が作られたのは、マヤ祭司のグループの委員会(Comité de grupo de sacerdotes maya)が、市会(municipalidad)に対して援助を要請したからだろうと、ドン・ディエゴは言う。しかし、その委員会のメンバーの誰一人として彼は知らなかった。シンディコのドン・Aは知っているだろうという。

マヤ祭司にもとづく信仰が、十分な御利益をもたらしたことは、1944年の革命のときに4名のシンディコが首都に出たが、誰も殺されることもなく帰ってきたことがその証左だという。

コストウンブレは、暴力から我々モモステナンゴ人(Momosteco)の身を守ってくれたという。たとえば、1901年ごろ、ウビコ大統領の時代に国内で暴力沙汰があったが、モモステナンゴに災難がふりかかることはなかった。1945年の暴力の時期に暗殺者や売国奴(traidores)が国内横行したが、ここはそのような不幸に見舞われなかった。

1980年代初頭にキチェやウエウエテナンゴなどの各地でおこった内戦にもモモステナンゴは巻き込まれなかったが、それもマヤ祭司が共同体のために祈っていたからなのである。

マヤ祭司の数をふくめたその盛衰は、時代の変化に対応している。彼が6歳の時の1936年には相当の数のマヤ祭司がいたらしい。

ところが1945年以降、カトリック教会の外国人主任司祭(cura de extranjero)に先導されたカテキスタたちが、マヤ祭司がおこなう儀礼を厳しく非難したために、マヤ祭司の活動が大きく停滞したという。

ところが現在では、カテキスタたち自らが祈願行為をする、すなわち「焚く

quemán]という実践をおこなっている。また、毎週日曜日には、教会でミサがおこなわれているが、神父がその説教の中で、今日はマヤ暦の「何日」であるかを説明する。またカヒブ・ノホというマヤ語の名称をもつ私立の小・中学校がでてきたし、その学校の授業の中でマヤの儀礼習慣を生徒に教えているという。

モモステナンゴのそれぞれの家族には、よく相談するマヤ祭司をもっている。マヤ祭司は、それぞれの家族が持ち込む相談を受けるのである。ドン・ディエゴもまた、25家族ほどの相談を受け入れる家族——これは文字通り彼のクライアントを意味するものと思われる——をもっている。マヤ祭司が祈る際に4つの方向すべてに祈るのは、なにも単なる人々のためだけではない、グアテマラ全体のために祈るのだという。

言うまでもないが、エヴァンヘリコ（福音主義派プロテスタント）たちは、マヤ祭司の活動を厳しく批判している。マヤ祭司は、悪魔（diablo）であるというのが、その主旨である。

ドン・ディエゴは、夜中のほうが人が少なく集中できるという理由で、彼について学びたいとする弟子をつれて、1998年12月30日はパサバルで午前2時から3時に儀礼をおこなった。

儀礼を学ぶにはキチェ語を学ばねばならないか、という私の質問には「多くを必要としない」と答えた。つまり、スペイン語でも学ぶことができるということだった。

キチェ語でチュチカハウ（*chuchqajaaw*）というのが、スペイン語の祭司（*sacerdote*）あるいは、プリンシパル（第一人者、首長）のことである。「焚く人」のことをレトウパタン（*letupatan*）という。ドン・ディエゴによると、アハ・キーフ（*aj q'ij*）というのは、必ずしも「焚く」儀礼に従事するだけではなく、人（*aj*）と日あるいは陽（*q'ij*）の文字通りの意味「太陽の人、暦＝時間を数える人」に由来する「時を数える」いくつかの作業全体を指す言葉だということである。

ドン・ディエゴの父親はマヤ祭司であった。他方、彼の小父は、町長（*alcalde principal*）あるいはチュチカハウであり、バタヨン（軍隊）のリー

ダーだった。

同業者のドン・E・Iは、いつも本をもって (tiene cargo de libro=書物／司書の役割という意味もある) 聖地で歌を歌っているが、彼はクライアントに対して露骨にお金をせびるので、「本物の」マヤ祭司ではない。ドン・E・Iは声を出して歌うので、その声に対して反感をもつ者 (=敵) がいる。また、彼は教会の前で行商をしており、儲けた金で酒を飲むので、よい祭司とは言えないとも言う。

それに対して、いつも彼と一緒に行動しているドン・Cは、よくいろいろなことを知っているので、本物のマヤ祭司 (Sacerdote Maya) だとドン・ディエゴは太鼓判を押す。

どんな儀礼の時にも、声を出さずに静かにすることは、マヤ祭司の必要な資質である。だからドン・E・Iの評価は低い。例えば、ドン・ディエゴのところに、エヴァンヘリコの信者が時々相談にくるらしい。その信者は、他の人に見られないようにこっそりとやってくるのだから、ドン・ディエゴ自身も秘密を守ることを信条としているらしい (その秘匿すべきことがらを実際には私に告げはしたが)。

商人として小銭を稼ぐのもよくないようである。というのは、職業がら金銭をせびる癖が身についてしまうからよくないのだという。

酒を飲むのも、マヤ祭司たる者にはよくない。というのは、マヤ祭司は、儀礼の時には性交を慎まなければならないが、酒に酔ってしまうと、その欲望にまけて性交をしてしまう可能性があるからだ。

ドン・ディエゴの言う、マヤ祭司の条件とは、よく自己管理ができるということのようである。

北米の民族誌家であり人類学者であるロバート・カーマックが当地モモステナングで調査をしたのは、1958年から60年代であり、彼やドン・Cは、彼のインフォーマントになった (cf. Carmack 1995)。

私が教師Mから聞いた1985年のマヤ暦新年の *wajxaqib' b'atz'* に、たくさんのマヤ祭司が集めたという話を彼は否定した。その当時はまだ「アクション・カトリカ」の勢力が強く、このマヤの新年の集まりはそれほど盛況ではなかつ

たというのだ。

「しかし、今ではアクション・カトリカの連中も焚く」のだという。1930年から1940年代は、今日のように多数の人たちが来ていた。当時は、キチュのサンタ・ルシアからも来ていた。

その後、主任司祭 (párroco) がやってきて、「焚く」ことを禁じた。

——その主任司祭とは、アクション・カトリカのことか？ [池田の質問、以下同じ]

そうだ。そのために、マヤ司祭の活動は半減した。その後、現在は、当時の8割りぐらい盛り返したのだ。現在では、もう先に述べたように、神父までマヤの日付を話すようになったからだ。

——どうして、勢力を盛り返してきたのか？

それは主任司祭が外国人だったからだ。外国人にとってマヤの儀礼は「自分のものではない」。だから彼らはそれを禁じたのである。ところが現在は、グアテマラ人が司祭をやっているために、自分たちのものであることを理解しているから、それを認めるようになったのだ。

——ところでグアテマラ人の司祭が教会に赴任したのはいつごろなのか？

1980年だろう。

——ということは1970年代は、まだマヤの儀礼は禁じられていたのか？

そうだ。1996年には完全に変わってしまった。

現在ではカテキスタ自身が、チュチカハウで、自ら「焚く」ものもいる。

コストウンプリスタが悪く、マヤ司祭が善いというわけではない。両方とも善い存在なのだ。ところが、コストウンプリスタは、人々にお金をせびる (piden dinero) のだ。またマヤ司祭が人々がよき生活をおくれるように祈るが、コストウンプリスタは、クライアントの依頼だけを受けて (金のために) 占いをやる人のことである。

人々が苦しんでいるときに助けるのがマヤ司祭である。他方、コストウンプリスタはただ依頼を受けて占いをするだけで、彼らを助けない人たちだ。

マヤ司祭は (絶対に) 金をせびらない。マヤ司祭は、ただひたすら「時を知る」ことに専念しなければならない。クライアントは、自発性にもとづいて喜捨するのだから、お金を要求してはならないのだ。

—マヤ司祭はこれからも増えると思うか？

私には、海岸部 (コスタ) のマサテナンゴ市とグアテマラ市に1人ずつ、そして、当地に2人、これから自分のバラ (託宣の用具) を授ける人 (como es alumno) がいる⁵¹。だから、これからも増えるだろう。

さまざまなところに散らばった彼の弟子たちは、それぞれの地域でクライアントの要請に応じて占いや助けに応じている。ところが、彼らは特にめだった営業をするのではない。ドン・ディエゴのように、自宅に相談を受けるような場所をもつ程度にとどまっている。

マヤ司祭にクライアントがつくつかつかないかは運命次第である。彼の話によると、ちょうど私が彼のところに来たのも、神が私に商人Bに会わせて、さらに商人Bは従兄弟のディエゴを紹介し、私を引き合わせたように、すべて神の導きによるものだという。つまり一種の「鎖」のようにつながっているのだ。

彼は40歳代半ばで、彼の息子 (mi patojo) を失い、52歳の時にさらに先妻を失ってやもめとなった。その後、現在の妻と再婚し、現在 (2000年1月) 12歳、11歳、6歳の息子と3歳の娘がいる。

彼は、マヤ司祭になるために、多くの人について学んだが、みな彼にお金を

せびってきた。

マヤ司祭になるのは、運命=約束 (compromiso) なのだ。

——今は内戦もなく人々が平和に暮らしているが、それはなぜなのか？

それは [レオン・] カルピオ前大統領 (1993-95) が「焚いた」からだ。サン・フランシスコ・エル・アルトとモモステナンゴの間の山頂 (Joyam) でおこなったからだ。

ドン・ディエゴは、人の運命は分からないという。70歳だった彼の従兄弟は、さっきまで話していたのにあっという間に死んでしまった。

2. その後のドン・ディエゴ

2000年1月にドン・ディエゴの家を再訪する。

ドン・ディエゴの家を訪問するといつもラジオが五月蠅く鳴っている。どうしてラジオをでかい音でかけるのか、という私の質問に対して、クライアント (los pobres = 貧者) が来たときに、その話を通行人に聞かれないために音を大きくしているという。確かに彼の家のクライアントの話を聞く部屋——再訪した時は真新しい机と椅子がおかれてあった——は、窓を閉じてはいるが、その向こうは人が通ることができる路地になっている。

チュチカハウの仕事とは、人々を守ることである。現実の社会に弁護士がいるように、チュチカハウとは人々を災厄から守る使命をもっている。人々はさまざまな理由で人生を全うすることができない。「ドン」 (= 主人 / 支配者) の力をもって人を守るのである。ちょうど現実の社会に政府があるように、チュチカハウとは人生における政府のような役割を果たすのである。

——チュチカハウになるには [教師Mが言うような] マヤのカレンダーによる生まれた日付によって決まるのでしょうか？

そのようなことはない。誰でもチュチカハウになる運 (fe) をもっている。人々がコストウンブレをおこなうのは、泥酔して街頭で寝たり、行商中に強盗にやられないように、日々の生活を災厄から守ってくれるようにお祈りするのだ。

—どうしてモモステナンゴにはチュチカハウが多いのでしょうか？

この町はもっとも神聖な町だからだ、聖地パクロムは守護聖人サンティアゴによって守られている、あるいはパクロムそのものが守り主 (神) サンティアゴだからだ ("Paklom es patrón Santiago".)。

かつて (1965年頃) はチュチカハウであることを証する証明書を携帯していた。しかし、民主主義の世の中になって誰でも自由に儀礼を行うことができるようになってコストウンプリスタが自由に儀礼を行うことができるようになったのだとディエゴは説明する。

—その証明書あるいは免許書 (carnet) は誰が発行していたのですか？

行政統治省 (Ministerio de Gobernación) で、毎年その証明書を更新しなければならなかった。あの当時 (ca.1965) は誰も儀礼をやることを恐れている、そのような証明書がないとおおっぴらには儀礼を行うことができなかった。

ドン是世界の支配者あるいは儀礼の主宰者たる資格をもった人間のこともある。ドンというのは、ちょうど家庭におけるドン (家長) のような次の4つのことを言う。

(1)ワルバルハ (*walbalja*) : 家族の存在

(2)ウィルマル (*wilmal*) : 農業つまりトウモロコシの存在

(3)メビル (*mebil*) : 商売あるいは運命の処遇

(4)ヒク (*jiq'*) : 希少な事象

1980から85年当時のチュチカハウは、実質的に非合法あるいは破壊活動 (*clandestino*) とみなされた。誰もその活動を大ぴらにしなかった。しかし、モモステナンゴは、聖地でありチュチカハウの活動があったから、そのゲリラの活動の時代にたった一人しか死人を出さなかった。その死人はゲリラ活動に参加して死んだのだから、実質的に死人を出さなかったも同然である。ドン・ディエゴは夜中に儀礼をやっている時にゲリラの一群と出会ったことがあるという。しかし彼らはディエゴに挨拶をして通り過ぎただけだ。そのことを他の人に語ったとき「よく殺されなかったことだ」と言われたが、それはドン (= 支配者) の力によるものだと、説明する。

したがってチュチカハウに対する需要があるのは当然である。磁石に鉄が引きつけられるように、人々はチュチカハウを探して彼らのところにやってくる。彼/彼女ら、すなわちクライアントの動機は経済的なものだとということになる。

——モモステナンゴには商人と行商人がとても多いようだが、コストウンプリスタと商人や商業の関係はどうなっているのでしょうか？

商業に従事するのは、生活における必要性のためだ。モモステコ (モモステナンゴの人間) は、メキシコやベリース、コバンやペテンまで行商をしている。商人あるいは行商人に会えば、それは皆モモステコなのだ。

モモスの人たちがなぜ商人になったのかを説明する有力な説明というのはいくにもないように思える。彼らが指摘できるのはモモステコは生粋の商人であるという事実の追認だけである。

モモステナンゴの人たちは、グアテマラのどこでもモモステコの商人と出会うことを知っている。また行商に出た場合でも、行商人どうして、情報交換をしたり、同郷どうして庇いあうこともある。商人独特のビジネススマイルや話

し上手ということも子供の時代から学ぶようだ。これらのハビトゥスが、彼らの商売をする状況に対して貢献していることは明らかである。もっとも行商人は、グアテマラ市の庶民が集まる通りや村落部の隅々に行商するために、利益率はそれほどよくないように思える。にもかかわらず行商に従事するのは、以前からの伝わっているノウハウと、行商の行く先々で出会うネットワークが面々と続いているからだろう。

ドン・ディエゴの経歴を確認する。彼は今まで、警察の長、ムニシパリダの役職、セントロ・デ・サルーの審議委員 (consejero)、ムニシパリダの文書司書などを40年間、汚職に手を染めることなく (papel limpio) 勤めてきた。彼によると20年間は国家に、残りの20年間はムニシパリダに奉職してきており、今から4年前の66歳の時に退職し恩給を得る身になったという。

——人はどうして不幸になるのでしょうか？

第一に人は怠け者で、自ら働こうとしない。次に、コストウンブレ (儀礼) を行わない。さらには、男も女も悪い考えをもって別の男女と関係を持とうとする。だから、皆不幸や貧乏になるのだ。

——ではそのような不幸から救われる方法とはなんのでしょうか？

蠟燭を点して祈ることだ (= 儀礼をおこなうことだ)。

——ワハシャキブ・バアアツ (Wajxaqib' B'aatz') について説明してください。

今年は2月19日と11月5日の2回ある。この日にはすべての負債を返済しなければならない。また、この日に弟子のチュチカハウは9カ月の修業を終えて師匠からバラを授かるのである。私 (ディエゴ) は、師匠のドン・G・J・Bからバラを授かって3日後に、最初のクライアントがトトニカパン (地名) から

私を頼って相談にやってきた。

—どのようにして、ドン・ディエゴのことをそんなに早く知ってやってきたのでしょうか？

神がその道筋を照らしたからだろう。

ディエゴは今まで12名の弟子にバラを授けた。そのうち4名が故人で8名が存命している。もっとも最近授けた弟子は、30代の男で1999年11月のワハシャキブ・バアツ (*Wajxaqib' B'aatz'*) の時にバラを受けた。バラを受けた人の中には、1998年に私がお名前を聞いていたサン・フランシスコのAというグリンガ (北米の白人女性) の人類学者も含まれている。彼女は、アンティグアからモモステナゴに通ってきてディエゴについて学び、最終的にバラを授かったという。

—チュチカハウになるための勉強はすべて暗記しなければならないのですか？

そんなことはない。メモを取りたいければ筆記すればよいのだ。

—チュチカハウになるためにはキチェ語を知っていなければならないのですか？

スペイン語だけでもマスターすることができる。

彼は最後に優秀なチュチカハウとしてドン・C・Aの名前を挙げた。ドン・C・Aは朝やお昼に儀礼をおこなっているが、ディエゴは極度の遠視で日中は目がまぶしくて疲れるので、夜や夜明け前に儀礼を行っている。'

ディエゴの子どもたちに、将来何になりたいか？と聞いてみたら、一人は教

師かりセンシアド (大学卒業の学士)、もう一人は飛行機のパイロットだった。

彼の師匠たるチュチカハウであるドン・G・J・Bは、20年以上前に亡くなった時に80歳以上の高齢者だったという。しかし、彼が34歳の1963年の時に、ドン・G・J・Bは40歳から50歳ぐらいだったというので、このあたりの彼の記憶は曖昧である。

ドン・G・J・Bは長い間商売人として旅に出ていたが、やがてムニシバリダで第二シンディコ (sindico: 管財人) を勤め、その後はマヤ司祭=チュチカハウをもっぱらの生業としていたという。

ドン・G・J・Bは生前、さまざまな弟子の中でも自分 (ドン・ディエゴ) が一番優秀であると言っていたとディエゴは誇らしげに語る [つづく]。

註

- 1) 文中でイタリックにしている言語はキチェ語である。キチェ語の表記は、マヤ言語アカデミー (la Academia de las Lenguas Mayas de Guatemala) の表記法にもとづいたものである (Saqijix 1997)。
- 2) 調査のためのグアテマラ共和国等への海外渡航期間は、平成10年12月19日から平成11年1月18日および平成11年12月20日から平成12年1月20日であった。渡航は、平成11年度文部省科学研究費補助金「都市化環境における実践コミュニティの人類学的研究」(研究代表者・田辺繁治・国立民族学博物館教授) による中央アメリカ、グアテマラ共和国での現地調査にもとづくものであるが、予備調査やそれに関連するマヤ先住民運動などについての資料収集は平成11年度文部省科学研究費補助金「グローバル化によるグアテマラ国家ナショナリズムと汎マヤ・エスニシティの形成」(研究代表者: 太田好信・九州大学大学院助教授) にも依っている。この場を借りて関係機関・各位に謝意を表したい。なお調査の際に使用した言語は主にスペイン語であり、当時学んでいたキチェ語での聴取も一部でおこなった。
- 3) 暫定版ともいえるプレプリント版は、<http://www0.let.kumamoto-u.ac.jp/cs/cu/000224gua.html> (2000年11月10日) で公開しているが、内容に異同がある。
- 4) 私がカトリック教会の前のスタンドで購入した、マヤのカレンダーの1999年版では、6月4日金曜日が *Wajxaqib' B'atz'* となっていた。
- 5) バラ (barra) とは、赤色のインゲン豆に水晶が入った小袋のことで、これは託宣のための道具のことである。「バラを授ける」とは、弟子が師匠から修行を終了した際に、師匠がバラを授けるので、弟子が一人前になったことをしめす。

文献

Bloch, Maurice (モーリス・ブロック) 1994

【祝福から暴力へ：儀礼における歴史とイデオロギー】田辺繁治・秋津元輝訳，
東京：法政大学出版局。

Carmack, Robert M. 1995

Rebels of Highland Guatemala: The Quiche-Mayas of Momostenango.
Norman: University of Oklahoma Press.

Saqijix (Candelaria D. Lopez Ixcoy) 1997

Ri Ukemiik Ri K'ichee' Chii': Gramática K'ichee'. Iximulew (Guatemala):
Editorial Cholsamaj.

田辺繁治 (Tanabe, Shigeharu) 1997

苦しみと人間の可能態—北タイにおける霊媒カルトとH I V感染者グループ—，
【新たな人間の発見】岩波講座文化人類学第1巻，pp.181-212，東京：岩波書店

Tedlock, Barbara. 1992[1982]

Time and the highland Maya. Albuquerque : University of New Mexico
Press.

Tedlock, Dennis(trans.) 1996

Popol vuh : the Mayan book of the dawn of life. New York : Simon &
Schuster.